

■ そろそろドル/円は上値の目安に到達！？

一昨日（21日）のNY時間にドル/円は一時163円台前半の水準まで上昇し、巷間「39年ぶりの円安水準」と話題になっている。中東情勢が再び混んとしてきている目下の状況を考えれば無理もなく、足元では「有事のドル買い」優勢の展開が続く。

6月に米国がイランと結んだ戦闘終結に向けた「覚書」は簡単に反故にされ、トランプ米大統領は「覚書なのだから大した意味はない」などと述べる始末。「それを言ったらしまい」なのであって、戦闘終結のために講じ得る手立ての選択肢は見る見る狭まっている。まさに「泥沼状態」と言え、先行きがまったく見通せない状況にあってドルを手放せというのは無理な話ということになる。

前回更新分の本欄で触れたドル/円と21日移動平均線（21日線）との位置関係にしても、足元では再び同線から上放れる動きとなってきた。

「米国でガソリン価格が再び1ガロン＝4ドル台に乗せてきた」という話題は、あらためて米利上げが前倒しされる可能性に対する市場の思惑を刺激する。ただ、少し長い目で米利上げがドル買い材料視され続けるかどうかは微妙でもある。

今のところ「米景気は底堅い」との認識が一般的であるようだが、米国の一般家庭は家計支出が増大するなか、何とか持ち堪えている状況にあるとも言える。米国の貯蓄率は趨勢的に低下してきており、一方でカードの長期延滞率は15年ぶりの高水準に達してきているという。15年前というのはリーマン・ショックの後遺症で多くの家庭がやりくりしに苦しんでいた頃である。

あろうことか、食料品のような日常的な支払いでさえ後払い決済で行うケースが増えており、その割合は2年間で約2倍に達していると聞く。そんな状況下で一段とインフレが高進し、それを抑えるために米連邦準備理事会（FRB）が利上げで対応したならば、この秋以降、米消費の動向は相当にペースダウンして行くだろう。むろん、そこまでの事柄を冷静に市場が織り込み始めるのは、まだ先のこととなろう。

日本の6月の貿易収支が2カ月連続の赤字に陥ったことも、このところの円安進行の原因の一端ではある。同月については、原油の輸入量が前年同月比で13.7%も減少したのにも拘らず、輸入額は同59.3%増となった。中東以外の地域からの代替調達が進んでいるが、国際的な原油価格そのものが強含みで推移しているのであるから致し方ない。

とはいえ、ここにきて複数のエコノミストから「そろそろドル安基調に回帰するのでは」との見方が出てきていることも事実。安全資産としてのドルの需要や米利上げ観測を背景にドルは買い支えられてきたわけだが、それらは既に織り込み済みであるとも言える。

シカゴ通貨先物市場における投機筋の円売りポジションの推移を見ても、6月16日時点で過去最高の26.75万枚にまで積み上がった円売りポジションが、その後は7月14日時点で23.86万枚と徐々に減少傾向を辿り始めている。



また、左図に見るように25年4月安値＝139.88円を起点とするドル/円の強気相場において、5月6日以降の強気波動が「第5波」にあたるとの見方もある。

少なからぬ分析者に支持されているエリオット波動理論では「第5波の値幅は第1波に等しくなる」というのが一つのセオリー。そうであるとすれば、第5波の上値の目安は計算上、163円台後半から164円あたりということになり、足元では同水準が意識されやすいと個人的には見る。

（07月23日 11:40）